

展示会

# 「第4回アジア・太平洋水サミット」に出展

「水に感謝し、水の大切さを伝える」活動を熊本から世界に発信！

ミツカン水の文化センターは、2022年4月23日(土)、24日(日)に熊本市で開催された「第4回アジア・太平洋水サミット」の現地展示会ブースに出展しました。

ブースでは「水に感謝し、水の大切さを伝える」という当センターの活動内容を、2021年～2022年に発行した機関誌『水の文化』の特集を例に、壁面全体を使って紹介しました。

来場者からは「なぜ水サミットにミツカンが出展しているのかと思ったが、説明を聞いてよくわかった」「20年以上も活動を続けていることがすばらしい。もっと多くの人に知らせてほしい」「機関誌を職場で読んでいたが、ミツカンの活動とは知らなかった」などの声をいただきました。来場者に加えて、他の出展者とも交流を深める

ことができ、充実した2日間となりました。

現地展示会のブースデザインにあたり写真をご提供いただいた皆さまに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今後も当センターは、ミツカングループが「水」の恩恵を受け、「水」によって育てられてきたことへの感謝を忘れず、未来へ向けて「水」の大切さを伝えることによって、「人と社会と地球の健康」の実現に貢献してまいります。



「第4回アジア・太平洋水サミット」の現地展示会ブースで来場者に説明するセンタースタッフ



現地展示会のブースデザイン

機関誌「水の文化」連載「Go! Go! 109水系」



ライン館で自習する大学生たち(左)。白峰集落に溶け込んでいる坂本貴啓さん(右)

機関誌『水の文化』の連載「Go! Go! 109水系」でおなじみの坂本貴啓さん。2021年10月から東京大学 地域未来社会連携研究機構の特任助教として「北陸サテライト」(石川県白山市)に着任。調査・研究活動はもちろんのこと、さまざまな人や団体を巻き込んだかわまちづくりやワークショップなどに取り組んでいます。

連載「食の風土記」の取材後、編集部は坂本さんが暮らす白峰集落に向かい、築100年超の古民家を活用した北陸サテライト「ライン館」を訪問。このネーミングは、明治時代初期にドイツから来日して

白山信仰をはじめとする当地の自然・文化を調査した地理学者、ヨハネス・ユストゥス・ライン博士にちなんだものだそうです。

坂本さんはライン館を開放して、地元の人たちと情報交換する「ライン館茶話会」、白峰集落を舞台とする卒論に取り組む大学生たちとの「ライン館ゼミ」などオープンサテライト化を推進。また、白山麓にある国土交通省や環境省、林野庁などの国機関に白山市、区長会などが加わり、交流や連携を深める「ライン会議」にも取り組んでいます。坂本さんの今後の活躍に期待しています。

## 機関誌『水の文化』52号に関する訂正とお詫び

『水の文化』52号の記事に誤記がありましたのでお知らせいたします。

p45「天竜川流域の地図」における佐久間ダムの位置誤) 秋葉ダムを佐久間ダムとして記載  
正) 佐久間ダムを正しい位置(上流側)に移動

すでにお手元に届いている読者の皆さまに訂正してお詫びいたします。ホームページには訂正した地図を掲載しておりますので、正しい地図は以下のリンクよりご確認くださいませと幸いです。



### 機関誌『水の文化』制作について

ミツカン水の文化センターで発行しております機関誌『水の文化』71号につきましては、感染防止対策を徹底して取材活動を行ないました。また、取材先の皆さまには、顔写真撮影に関してマスクを外していただくなどのご協力をお願いしました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。72号以降も感染防止対策を徹底したうえで、機関誌『水の文化』を制作してまいります。



## 南西諸島のお土産をプレゼント!

取材で巡った南西諸島のお土産を抽選で6名の読者に差し上げます。当センターHPの「お問い合わせ」からご応募ください。ご希望の商品番号と送付先住所を最下部の「お問い合わせ内容」にご記入ください。



3名  
①屋久杉の箸&箸置き



3名  
②大島紬のキーリング

ホームページ問い合わせ欄

<https://www.mizu.gr.jp/customer/group/mizu.html>



## 皆さまからの感想、情報をお待ちしています!

『水の文化』71号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://www.mizu.gr.jp/form71.html>

アンケート用紙をお持ちの方は下記へご返信ください。

FAX: 03 (6784) 3056

## アンケートから「食の風土記」取材決定!

70号のアンケートでは皆さまよりさまざまな情報をお寄せいただきました。その情報をもとに72号の連載「食の風土記」では「えご」を取材する予定です。お楽しみに!さらなる情報提供もお待ちしております。

※ご意見は71号のアンケートよりお寄せください。右記の二次元コードからアクセスできます

- ・新潟県の中・上越地方～長野県北部を中心に「えご」という海藻を行事の際などに加工して食べる習慣があります。ぜひ取材してください
- ・琵琶湖周辺「水の国近江」の郷土料理「鮎ずし、鴨鍋、鯖そうめん」の特集紹介を!
- ・数年前、三次のワニ料理を初めて食べて感動!そこでいただいた鮎寿司も美味でしたので取り上げてください

(アンケートより一部抜粋)

### 編集後記

今回の取材で初めて訪れた屋久島。間近で見た「紀元杉」の凛とした佇まいに、言葉を失いました。自然に対する畏敬の念は、人が自然と持続的に共生していく上での原動力にもなると感じました。今後も、取材現場にはできるだけ足を運びたいと思います。自身が直接体感したことも踏まえて、読者の皆様に「読んで良かった」と思ってもらえるような「水の文化」を、お届けしていきたいと思えます。(中)

総論の中で「足るを知る」という言葉が出てきた。島の文化・暮らし・歴史を垣間見る中で、「現状に満足する」という表面的な意味ではない、力強い、しぶとさを感じた。島の守るべきよい部分を認識し、祭祀や移住者・テクノロジー等、活用できるものをどんどん使い、島の生活を維持・改善しようという知恵を絞っている。「足るを知る」からこそ、挑戦の精神が生まれるのかもしれない。(松)

20年ほど前に訪れた与論島。百合ヶ浜で星の砂を拾った事を思い出した。当時は水に特に関心もなく節水意識も低かったため、日本はどこでも水が豊富にあると思込んでいた。島の貴重な水を我々観光客は使わせていただいていたのだなあと、今さらながら感謝。あの美しい海にまたいつか行きたい。こんどは島の歴史をもう少し勉強してから。(飯)

母が久米島の出身で、小学校の夏休みに家族で旅行したときのこと。はての浜」という砂浜だけの島に行く機会があった。眼前に迫ってくるその姿は絶景で、子ども心にワクワクしたが、ほどなくして思い知る。日差しを遮るものがない。従兄弟に「地元の人は海ではTシャツを着て泳ぐよ」と言われたのを思い出した。当時の、美しさと過酷さのギャップを体感した記憶は鮮明に覚えている。(刀)

観光シーズンは与論島で働いて、オフシーズンは本土に帰って別の仕事をするとという女性たちに出会った。何に心惹かれるのか尋ねると「人と海」。即答だった。たしかに3つの島で会った人たちは誰もが初対面でも構えず親戚のように接してくれた。船が来ない日が続いても協力して生き残る。それが当然という島での暮らしが柔らかな人柄をつくるのか。私もそうしたいが、付け焼刃では難しい。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

## 水の文化 第71号

ホームページアドレス

<https://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中荳ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2022年(令和4年)7月初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学教授

制作

今村浩二

松本裕佳

鈴木彩乃

青木広実

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.18-23)

手塚ひとみ (pp.42-43)

開 洋美 (pp.10-17)

前川太一郎 (pp.24-29)

撮影

大平正美 (pp.42-43)

川本聖哉 (pp.3-5, pp.24-29)

藤牧徹也 (pp.10-17, pp.36-41)

渡邊まり子 (pp.18-23)

印刷

中荳総合印刷株式会社